

保育所保育指針の発達過程理解に関する調査からの考察

榎 原 博 美

1. 課題と方法

筆者が担当する保育内容に関する科目として1年前期開講の「保育内容環境Ⅰ」と2年次に開講される「保育内容人間関係」がある。これらの科目において筆者はそれぞれ、「発達と環境」「発達と人間関係」という項目を講義内容に組み込んでいる。今年度より本学での講義担当を開始した筆者にとって2年の講義内容においては1年の講義内容との重複や連続性はなく、そのため発達に関しての題材は1年と2年で同じものを使用することが可能であった。同じ内容を講義した上で、実習経験がない1年生と、実習経験を経た2年生で保育所保育指針の発達過程記述の理解に関してどのような相違が見られるのかを考察することで、実習経験が学生の発達理論理解に及ぼす影響を把握し、さらにそれらの結果を授業内容に活かしていくことを目的としている。

本稿は、昨年度まで筆者が勤務していた他の短期大学の保育系専攻での調査¹⁾を発展させるものとして位置づけられる。前任校での調査では、方法として平成20年3月28日付け「厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知・保育所保育指針等の施行等について」によって改定され平成21年4月1日より施行された改定「保育所保育指針」について、発達記述の大綱化がなされた「第二章 子どもの発達」の「2 発達過程」で8段階の発達過程として記述された内容について、授業ではそれらを直接には解説しない別の題材（本学でも同じ題材を使用）で発達について講義解説を行った上で指針の第二章の2の内容の記述がおおむね何歳何か月の発達に相当するかについて解答する小テストを実施した。その結果、授業で得た知識と授業での知識に加えて実際の保育現場での実習経験を得た後での調査結果に若干の相違が見られた。また発達理論が理解しにくい発達過程の年齢・月齢を分析することができた。それにより、それらの結果が前任校特有のものであるか、一般的なものであるかを検討することが課題として浮上し、そ

の課題に応えるため他の養成校でも同様の調査を実施する必要が生じたことが今回の研究の動機である。

方法としては、前任校での調査と同様の小テストを実施し、得点による1年生と2年生でのテスト結果の比較および年齢・月齢ごとの発達過程記述に対しての正答率を割り出し、正答率の低い発達過程の年齢・月齢を分析した。さらに、授業で取り上げた題材から抽出された発達の特徴と保育指針から析出した発達の要点を比較した。それらを分析・考察することで今後の指導における課題を示したい。

2. 授業における発達に関しての講義題材と発達の特徴

前任校と本学において講義で発達を題材として取り上げた際に、乳幼児の全面発達をドキュメンタリー的に映像で示す教材として「さくらんぼ坊や」シリーズのVTR²⁾を使用した。

授業では、VTRを視聴した後で、年齢ごとの発達の特徴についてまとめ、解説を加えた。以下でそのまとめについて紹介しておく。

まず、講義では、さくらんぼ坊やの舞台となるさくらんぼ保育園の概要と保育の特徴、0歳から就学前までのトータルな発達の流れを理解させる目的でシリーズの1を視聴させる。その後、それぞれ0歳から2歳、3歳、4歳、5歳、6歳の発達についての内容になったシリーズの2から6を視聴させる。視聴後にそれぞれの年齢における発達の特徴をまとめたものを表にした。

表 1

年齢段階	発達の特徴
0～2歳	誕生から約9か月でははいはい。1歳前後で歩行が始まる。わし掴みからだんだん3本指で掴めるようになる。模倣が始まる。言葉が始める。道具を使う最初の段階。気に入った遊びを繰り返す。感覚神経の発達で砂や水で十分に遊ばせる必要がある。1歳児前半はま

	だ滑り台や山を前向きに下りられない。両脚跳びは2歳を過ぎた健常児で可能に。
3歳	言葉を豊富に獲得し自己を主張する。自我が芽生える。乳児から幼児へ脱皮。人格形成の基礎を築く。自我と自我のぶつかり合いでけんかが多い。意味づけをして絵を描く。絵画では頭足人の時期を経る。じゃんけんやかくれんぼなどはまだ出来ない。
4歳	保育者が入らなくても仲間同士で遊べる。かみつかれても反撃しないなど少し我慢することが出来るようになる。じゃんけんもできる。ルールがわかる。想像力のある遊びが出来る。運動機能もより高まりわんぱく時代の幕開けとなる。記憶力が備わり保育者との約束を覚えている。絵画では基底線を描く。
5歳	全身のバランスよい発達が一層進む。馬とびもできる。相手の気持ちがわかる。約束を守る、役割分担やルールを決めた遊びができる。ままごとなどで役になりきり空想のストーリーを想像できる。仲間との関わりが一層深まる。
6歳	係り活動、当番活動が出来る。はさみを使って細かいものを切ることが出来る。集中力をもって一つのことをやり遂げられる。仲間と協同して課題に取り組みテーマをもった活動や遊びをやり遂げることができる。体験した生活を絵で表現できる。創造力、想像力が一層高まる。

3. 発達過程理論についての小テストの内容

発達過程理論把握について的小テストの内容をここに示しておく（前任校と同じ）。

＜タイトル＞「発達過程について的小テスト」

＜設問＞以下の記述はおおむね何歳の発達の様子であるか？実習での経験を思い出しながら以下の語群から記号で選び、かっこに入れなさい。

ア) 基本的な生活習慣が身につく、運動機能はますます伸び、喜んで運動遊びをしたり、仲間とともに活発に遊ぶ。言葉により共通のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動することが増える。さらに、遊びを発展させ、楽しむために、自分たちで決まりを作ったりする。また、自分なりに考えて判断したり、批判する力が生まれ、けんかを自分たちで解決しようとするなど、お互いに相手を許したり、異なる思いや考えを認めたりといった社会生活に必要な基本的な力を身に付けていく。他人の役に立つことを嬉しく感じたりして、仲間の中の一人心としての自覚が生まれる。()

イ) 座る、はう、立つ、つたい歩きといった運動機能が発達すること、及び腕や手先を意図的に動かせるようになることにより、周囲の人やものに興味を示し、探索活動が活発になる。特定の大人との応答的な関わりにより、情緒的な絆が深まり、あやしてもらおうと喜ぶなどやり取りが盛んになる一方で、人見知りをするようになる。また、身近な大人との関係の中で、自分の意志や欲求を身振りなどで伝えようとし、大人から自分に向けられた気持ちや簡単な言葉が分かるようになる。食事は離乳食から幼児食へ徐々に移行する。()

ウ) 全身のバランスを取る能力が発達し、体の動きが巧みになる。自然など身近な環境に積極的に関わり、目的を持って行動し、つくったり、かいたり、試したりするようになるが、自分の行動やその結果を予測して不安になるなどの葛藤も経験する。仲間とのつながりが強くなる中で、けんかも増えてくる。その一方で、決まりの大切さに気付き、守ろうとするようになる。感情が豊かになり、身近な人の気持ちを察し、少しずつ自分の気持ちを抑えられたり、我慢ができるようになってくる。()

エ) 全身運動が滑らかで巧みになり、快活に跳び回るようになる。これまでの体験から、自信や、予想や見通しを立てる力が育ち、心身ともに力があふれ、意欲が旺盛になる。仲間の意思を大切にしようとし、役割の分担が生まれるような協同遊びやごっこ遊びを行い、満足するまで取り組もうとする。様々な知識や経験を生かし、創意工夫を重ね、遊びを発展させる。思考力や認識力も高まり、自然現象や社会事象、文字などへの興味や関心もふかまってくる。身近な大人に甘え、気持ちを休めることもあるが、様々な経験を通して自立心が一層高まってくる。()

オ) 歩き始め、手を使い、言葉を話すようになることにより、身近な人や身の回りの物に自発的に働きかけていく。歩く、押す、つまむ、めくるなど様々な運動機能の発達や新しい行動の獲得により、環境に働きかける意欲を一層高める。その中で、物をやり取りしたり、取り合ったりする姿が見られるとともに、玩具等を実物

に見立てるなどの象徴機能が発達し、人や物との関わりが強まる。また、大人の言うことが分かるようになり、自分の意思を親しい大人に伝えたいという欲求が高まる。指差し、身振り、片言などを盛んに使うようになり、二語文を話し始める。()

カ) 基本的な運動機能が伸び、それに伴い、食事、排泄、衣類の着脱などもほぼ自立できるようになる。話し言葉の基礎ができて、盛んに質問するなど知的興味や関心が高まる。自我がよりはっきりしてくるとともに、友だちとの関わりが多くなるが、実際には、同じ場所で同じような遊びをそれぞれが楽しんでいる平行遊びであることが多い。大人の行動や日常生活において経験したことをごっこ遊びに取り入れたり、象徴機能や観察力を発揮して、遊びの内容に発展性が見られるようになる。予想や意図、期待を持って行動できるようになる。()

キ) 歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能や、指先の機能が発達する。それに伴い、食事、衣類の着脱など身の回りのことを自分でしようとする。また、排泄の自立のための身体的機能も整ってくる。発声が明瞭になり、語彙も著しく増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるようになる。行動範囲が広がり探索活動が盛んになる中、自我の育ちの表れとして、強く自己主張する姿が見られる。盛んに模倣し、物事の間の共通性を見いだすことができるようになるとともに、象徴機能の発達により、大人と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しむようになる。

()

ク) 誕生後、母体内から外界への急激な環境の変化に適応し、著しい発達が見られる。首がすわり、手足の動きが活発になり、その後、寝返り、腹ばいなど全身の動きが活発になる。視覚、聴覚などの感覚の発達はめざましく、泣く、笑うなどの表情の変化や体の動き、喃語などで自分の欲求を表現し、これに応答的に関わる特定の大人との間に情緒的な絆が形成される。()

<語群>

(1)おおむね 6 ヶ月未満(2)おおむね 6 ヶ月から 1 歳 3 か月未満(3)おおむね 1 歳 3 か月から 2 歳未満(4)おおむね 2 歳(5)おおむね 3 歳(6)おおむね 4 歳(7)お

おむね 5 歳(8)おおむね 6 歳

<解答>ア) →(7)、イ) →(2)、ウ) →(6)、
エ) →(8)、オ) →(3)、カ) →(5)、
キ) →(4)、ク) →(1)

4. 結果と考察

(1) 小テスト結果からの考察

小テストの設問の配点を各 1 点で、8 点満点で採点した。1 年生と 2 年生のそれぞれの結果について合計点の平均点を求めて比較した。その結果、1 年生の平均が 3.95 点で、2 年生の平均が 5.82 点であった。得点差は 1.87 点である。この結果から、実習経験がまったくない 1 年生よりも実習を経験している 2 年生のほうが発達理論の理解は進んでいるものと判断することが出来る。

さらに、設問ごとの正答率を調べ、おおむね何歳ころの発達についての理解が困難であるかについての分析を行った。その結果をまとめたのが表 2 である。

表 2

月齢・年齢 (おおむね)	1 年生の正答率	2 年生の正答率
6 か月未満	89.1%	100%
6 か月から 1 歳 3 か月未満	86.5%	95.6%
1 歳 3 か月から 2 歳未満	72.6%	94.6%
2 歳	37.4%	75.8%
3 歳	35.7%	75.8%
4 歳	56.5%	50.5%
5 歳	10.4%	38.5%
6 歳	8.3%	46.1%

最も正答率が高いのは 1 年、2 年ともに「おおむね 6 か月未満」についてである。次に正答率が高いのは、1 年、2 年ともに「おおむね 6 か月から 1 歳 3 か月未満」である。3 番目に正答率が高いのは、1 年 2 年ともに「おおむね 1 歳 3 か月から 2 歳未満」である。この結果からわかるのは、2 歳未満までの発達理論については実習経験の有無に関わらずよく把握されているということである。

次に、正答率の低いものについてである。1年生で最も正答率が低かったのが「おおむね6歳」についてである。以下「おおむね5歳」「おおむね3歳」「おおむね2歳」「おおむね4歳」と続く。1年生では、5歳と6歳との区別が著しく困難であったことが把握される。「おおむね2歳」「おおむね3歳」の混同も同様に示された。

2年生では、「おおむね5歳」の正答率が最も低い。以下「おおむね6歳」「おおむね4歳」と続く。1年生との違いとして「おおむね2歳」「おおむね3歳」についてはいずれも75%以上と正答率は低くはない。やはり実習経験の積み重ねによって発達理論の理解が高まったといっていよう。また、4歳以上就学前までの発達についての区別がつきにくいことがわかった。

(2) 前任校の結果との比較からの考察

発達に関する講義題材と小テストを同一内容で行った前任校との結果について比較検討した。表3が前任校での結果である。平均点は本学1年生の3.95点は前任校の4.04点よりわずかに低い結果となった。2年生は本学が5.82点で前任校2年の4.54点を1.28ポイント上回っている。前任校でも最も正答率が高いのは、1年、2年ともに「おおむね6か月未満」についてである。次に正答率が高いのは、1年、2年ともに「おおむね6か月から1歳3か月未満」である。3番目に正答率が高いのは、1年、2年ともに「おおむね1歳3か月から2歳未満」である。この結果から分かるのは、2歳未満までの発達理論については実習経験の多少に関わらずよく把握されているということである。表2と比較すると、前任校でも同様に1年、2年ともに2歳未満までの発達理論についての理解が容易であったことがわかる。

次に、正答率の低いものをみていこう。1年生で最も正答率が低かったのが「おおむね2歳」についてである。以下「おおむね5歳」「おおむね3歳」「おおむね4歳」「おおむね6歳」と続く。2年生では、「おおむね4歳」の正答率が最も低い。以下「おおむね6歳」「おおむね3歳」「おおむね2歳」「おおむね5歳」と続く。1年生と同様に2歳未満は把握されているが、2歳以上についての区別があまりできていないことがわかる。

しかし、1年生と異なり、50%未満の明らかに低い正答率であるのは「おおむね4歳」についてだけであり、その他はかろうじて50%前後の正答率になっている。

これらと表2での結果を比較すると、2歳以上についての正答率が低いことが共通している。本学1年生と前任校1年生での講義内容と小テスト実施時期（前期の最終授業）はほぼ同じであるが、前任校の1年生は前期終了までにすでに保育所での実習を経験しているという違いがある。それを反映しているのか、本学1年生における「おおむね5歳」と「おおむね6歳」における正答率の低さに比べて、実習経験のある前任校の1年生では正答率が30%は超えており、やはり実習経験の有無が発達理論理解に対してプラスの影響を与えていると考えることができるだろう。

表3

月齢・年齢 (おおむね)	1年生の正答率	2年生の正答率
6か月未満	96.2%	91.9%
6か月から1歳3か月未満	77.0%	78.4%
1歳3か月から2歳未満	69.2%	64.9%
2歳	25.0%	51.4%
3歳	34.6%	48.6%
4歳	35.6%	29.8%
5歳	30.8%	51.4%
6歳	36.5%	40.5%

(3) 講義題材における発達の特徴と保育所保育指針の発達の要点との対照からの考察

講義で発達を具体的に理解させる題材として使用した「さくらんぼ坊や」シリーズの発達の特徴と保育所保育指針における発達過程の記述で要点となる箇所とを対照させることで、両者の共通項と相違点などについて検討するため、指針の要点となる箇所を析出したものを表にしたのが表4である。

これらと、表1を対照してみると、発達過程の区分に違いがあるが、一様に理解の難しかった2歳以上に関しては多少の表現の違いはあるもの

の、共通項として、2歳では「模倣」3歳では「自我」4歳では「きまり（ルール）の理解」「我慢ができるようになる」5歳では「仲間との関わり的重要性」6歳では「役割分担、協同遊び」などが挙げられる

表 4

発達過程 (おおむね)	発達の要点
6 か月未満	首すわり、寝返り、腹ばい、喃語、特定の大人との情緒的絆の形成。
6 か月から 1 歳 3 か月未満	立つ、伝い歩き、探索活動、人見知り、離乳食から幼児食へ。
1 歳 3 か月から 2 歳未満	歩く、押す、つまむ、めくるなどの運動機能の発達、見立て、象徴機能、二語文。
2 歳	排泄の自立のための身体機能。語彙の増加。自我の育ちの表れとしての自己主張。盛んに模倣。大人と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しむ。
3 歳	自我がよりはっきりしてくる、友だちとのかわりが増えるが平行遊びである場合も。ごっこ遊び。
4 歳	想像力が豊かになる。目的を持って行動。結果を予測して不安になるなどの葛藤も経験。きまりを守ろうとする。けんかも増えるが自分の気持ちを抑えられたり我慢が出来るようになる。
5 歳	目的に向かって手段で行動。けんかを自分たちで解決しようとするなど社会生活の基本的な力を身に付ける。仲間の中の一人としての自覚。
6 歳	全身運動が滑らかで巧みに。これまでの体験から予想や見通しを立てられる。役割分担が生まれるような協同遊び。思考力や認識力が高まる。自立心が一層高まる。

発達の区分自体に違いがある2歳未満を除いては2歳以上では年齢ごとの発達の特徴になるが、実践記録である「さくらんぼ坊や」では抽出されない一般的な記述が指針ではまとめられている点がある。実践を実習に置き換えるならば、指針の

一般的な記述を知識の土台とした上で実習現場でそれらを応用して発達をとらえられようになることが望まれる。

いずれにしても、実践を経験していない段階で講義を通じて知識として発達理論を理解することは困難であることがあらためて把握された。

5. まとめと今後の課題

調査から、前任校と同様に実習経験が増すほどに発達過程の理論的な理解も深化するということが把握された。また、発達過程の理解において2歳以下は比較的容易であるが3歳以上では区別が困難であるということがわかった。前任校と同様の結果が得られたことで、やや一般的な傾向が見られたと考えられる。

今後の課題として、とくに3歳以上の発達について年齢ごと特徴と要点を実践からの知見も加えた上で指針の記述に沿って講義解説する必要があると感じる。今年度前期までに関しては、実験的に指針の記述を直接講義解説しないという方法によって調査したが、正答率の低さを考慮すれば、機会あるごとに指針の内容記述に触れさせることが必要であると思われる。1年生の早い段階で実習という形式ではなくとも実際の乳幼児を観察できる機会を設けることも一つの方法であろう。

今後も実習と他の保育に関する授業を有機的な結びつきをもって構想する方法を実践するためにこれらの結果を参考に授業内容を改善していきたい。

【注】

- 1) 拙稿「実習経験が学生の発達理論理解に及ぼす影響－改定保育所保育指針における発達記述理解からの比較分析と課題－」『鈴鹿短期大学紀要』第29巻、2009年。
- 2) 山崎定人・斉藤公子著『さくらんぼ坊やの世界－乳幼児の育ちゆくみちすじ－』旬報社、1983年、参照。

A Consideration from an Investigation concerning Understanding of Developing Process of Guideline for Early Childhood Care and Education at Day-care Center, “*Hoikusyo Hoikushishin*”

Sakakibara, Hiromi*

本稿は、教育・保育実習経験の積み重ねによる学生の発達理論理解の深化を明らかにすることおよび実習経験を経ても理解の容易でない発達過程の年齢段階について明らかにし、それらを実習科目と保育内容科目の両方を担当する筆者の立場から各々の授業の改善に活かしていくことを目的とした調査結果と考察である。

本学と同様に幼稚園教諭・保育士養成校である前任校での調査と対照させることで実習経験の有無による発達理論理解の深化と発達理論理解が困難な発達過程の年齢段階に対する一般的な傾向および本学独自の傾向が把握された。

キーワード：改定保育所保育指針，実習，発達過程，発達理論

*Nagoya Ryujo (St. Mary's) College